とある日曜日。
夕方から行われるコンサートに出向くため、吉羅は一人で電車に乗っていた。

移り変わる車窓の景色を見るともなしに眺めて、それにも飽きてふと車両の中に視線を移す。
すると、さほど混雑してはいないのに、乗降扉付近の女性の背後に若い男がぴったりとくっついているのが目に入った。
明らかに不自然なその光景を見入ると、女性の後姿にとても見覚えがあることに気付いた。
(略)
「日野君。大丈夫か？」
耳元で囁くと、香穂子は小さくうなずいた。
とても大丈夫な様子には見えない。
吉羅は嘆息すると、どこか落ち着ける場所に移動しようと考えた。

（略）
「……あの……」
言いにくそうに口ごもる香穂子に、吉羅は訝しげな目を向ける。

「食事じゃなくて。……二人になれる、ところに……」
だんだんと小さくなっていく声の語尾は、彼女の口の中に消えた。
暫く黙って考え込むと、吉羅はおもむろに席を立った。
（略）
「意地悪」
上気した頬を輝かせ、小さく香穂子が呟いた。

「もうキスはしただろう？」
「ちゃんとしてくれないと、大声出しますよ」
吉羅は苦笑しつつ軽妙な会話に応じる。

「私が、外に声が漏れるような安普請に誘うと思うかね？」
横臥位を取っていた吉羅が起き、素早く体を入れ替えて香穂子を組み伏せた。
（略）
「……このことは、言うまいと思っていたんだが」

香穂子に耳打ちすると、彼女は瞳を大きく見開いた。
「本当は、ずっと前から、君に惹かれていた。おそらく、君と初めて逢った時から……」
「私も……です。私も、前から好きでした。今も……」
「……君を、愛している。愛しいと思う。……君を抱いてもいいか、香穂子？」
「嬉しい……。抱いてください。あなたのものにしてください。そうしたら私、なんだって耐えられます」

愛しさが溢れ出すように、互いの体を苦しくなるほど抱きしめあう。
止められない想いに衝き動かされる。